

学校と地域の協働実践セミナー 公開講演

「学校が変われば地域が変わる

地域が変われば社会が変わる」

平成29年9月21日(木) 青森県総合社会教育センター 大研修室 参加者202名

学校と地域の協働実践セミナー公開講演が、9月21日(木)青森県総合社会教育センターで開催されました。今年度は前半が映画「みんなの学校」の上映会、後半が大阪市立大空小学校前校長の木村 泰子氏を講師に「学校が変われば地域が変わる、地域が変われば社会が変わる」と題して、学校と地域のつながり等についてご講演をいただきました。※木村氏の講演を一部省略して記載しました。

大空小学校の理念

地域の学校がその地域にあるかぎり永久に続く理念、それは全ての子どもの学習権を保障する学校をつくること、それが大空小学校の理念です。学力、学力と言っているうちに勉強について行けない子どもたちは、どんどん学校現場からいなくなっています。学力向上が公立学校で果たさなければならない一番の優先順位だと言っているうちは、一部の子どもにしか適用しない公立学校になってしまうのではないのでしょうか。

学力の前に、子どもたちが学習する権利を周りの大人が確実に保障する必要があります。地域（公立）の子どもたちにとって、受験を目標とした学力が一番ではなく、夢を実現するために必要な学力をつけてあげることが大切です。

誰が困っている子なのか

見た目がいかにも不良っぽい1年生 B くんのおにいちゃん。自分は中学に登校していないにも関わらず、1年生の弟を毎日学校まで送ってきます。その姿を見て、小学校の校門の前で見守っている大人から「どうせなら、小学校にもう一度通ってみたら？」や「いろいろやってもらいたいことがあるからお手伝いしない？」などと声をかけられます。それを聞いたおにいちゃんは「うっせー、くそばばあ。」と捨て台詞をはいて帰って行きました。

捨て台詞をはくおにいちゃんではありますが、毎日毎日弟を学校まで送ってきます。その姿を見た地域の人は、入れ替わり立ち替わりと声をかけます。そのような地域の人々に対し、「うっとうしじゃあ。」と言い放っていたものが、そのうち黙って立ち去るようになりました。

ある日、「小学校で算数の勉強をしようか。」と声をかけると、「めんどくせえ」といいながらも、小学校の職員室で九九を勉強するようになりました。

このように地域の中には、「おはよう」と声をかけてもにらみ返す子など、そんな子は普通にいると思います。このような子どもたちこそ実は様々な悩みや問題を抱えているのであって、逆に「おはよう」と声をかけて、「おはよう」と返事を返す子はあんまり困っていないのではないのでしょうか。「地域の中で今一番困っている子は誰かに気づき、学校の中で一番困っている子どもが学校の中で安心して学ぶことができる」そんな空気を作ることで、困っている子も周りの子もみんな安心できるようになるのではないのでしょうか。



大空小学校の空気

子どもたちの中には、他の地域の学校に通えなかった子でも、大空に来ると普通に通えるようになります。その子に聞いたところ、「大空は空気が違う」と言いました。「大空の空気はどんなの？」と聞いたところ、「普通だけど居心地がいい。」とその子は答えました。それでは、大空小の空気はなぜ居心地がいいのか？それは教師だけで学校を作っているのではなく、地域全体で子どもたちを見守っているという雰囲気が学校にあり、その空気を子どもたちも感じています。学校の教師だけではできない部分を地域の人々が補ってくれて、子どもたちを支えています。



地域の方々が子どもたちの近くにいることで、大人が子どもたちの手本になってくれます。学校だけでは支えきれない子も地域の中にはいます。そういった子どもを地域全体で見守り、育んでいくことが、これから子どもたちを育てていく上で大切なことなのではないでしょうか。

すべての子どもが安心して学校に通えるために

地域の公共の学校における一番の優先順位は、「地域のすべての子どもたちが安心して学べる土俵をどのようにして作るか」です。その土俵ができあがりさえすれば、あとは勉強を頑張りたい子は一生懸命勉強をすればいいし、散髪屋になりたい子は散髪屋になるために必要な勉強を頑張れば良い。

先生方はそれぞれの学校で一生懸命頑張っています。しかし、実際学校に来られていない子どもがいるということは、私たちもその現状をうけとめなければならぬし、何かしら変えなければなりません。

私たち毎日毎日様々な子と関わることで、子どもたちからたくさんのことを学んでいます。そんな中で、「学校の中における主語が『先生』である限り、全ての子どもの学習権を保障できない。」いうところにたどり着きました。学校の中の主語は「子ども」でなければいけないと。先生がこれだけ頑張っている、先生がこれだけ忙しい、先生がこれだけ努力をしている…それよりも、学校においては「子ども」を主語にして子どもの活動を支え、子どもを見守っていくことが何よりも大切なことではないでしょうか。



【参加者から】

- ・多様性の空気を作るのは、地域の全員であること、学校がコミュニティの場であることの大切さがわかりました。（学校支援コーディネーター）
- ・今、公立学校が抱えている課題に真正面から取り組んでいる姿が本当に素晴らしいと思いました。いつもうまくいくとは限りませんが、どんな子でも見捨てず、根気強く関わっていくことが、公立校の使命であると改めて考えさせられました。（公立学校教諭）



○木村 泰子 氏（大阪市立大空小学校 前校長）

「みんながつくる みんなの学校」を合言葉に、全教職員のチーム力で「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」ことに情熱を注ぐ。

学校を外に開き、地域の人々の協力を経て学校運営にあたるほか、特別な支援を必要とされる子どもも同じ教室とともに学び、育ち合う教育を具現化した。